

駿河塗り下駄は明治の初め、静岡市(当時の有渡郡)の下駄職人本間久次郎が、漆器職人に下駄を塗らせて全国に売り出したのが起源。一躍、静岡の代表的な産業となり、ピークの昭和35年ごろには300人ほどの職人がいた。しかし、着物から洋装へと生活様式が変わり、静岡では下駄に代わって、サンダル産業が主流になった。残った下駄職人は今、十数人となっている。

駿河塗り下駄の特徴は、塗りの手法の多さにある。その作業には、下地塗りに始まり、仕上げ磨き、裏塗りなど9つにもわたる工程がある。これは、江戸時代、静岡浅間神社の建立で、全国各地からさまざまな技法を持った職人が呼ばれ、それぞれの技術が後世に伝えられたからだと言われている。沈金を施したり、卵の殻を張ったりと、「幻の逸品」として市場に出ない

特注品も多い。

もともとサンダルや靴のデザインをしていた鈴木千恵さん。日本古来の下駄に関心を持ち、50年近い経験を持つ静岡塗下駄工業組合理事長の佐野成三郎さんのもとに弟子入りした。

鈴木さんの修行は既に4年。100足以上作り、大都市のブティックなどから注文が入ることもある。佐野さんは、逆に鈴木さんから教えられることもある。若い感性に刺激されての色や形が出来上がる。塗り下駄は個性や感性が製品の人気を左右する。「現代に合わせて工夫することも、伝統を守ることになる。Gパンに合う下駄も必要ですね」

テレビや本で紹介されるたび、全国の思わぬ所から注文が入り「まだまだ日本人の意識の底には、下駄への愛着が残っている」と、佐野さんは心を安らげる。

技、未来へ。



下地塗りで丹念に漆を塗る



若手ホープの鈴木千恵さんと師匠の佐野成三郎さん



伝統の技が息づく駿河塗り下駄



駿河塗り下駄